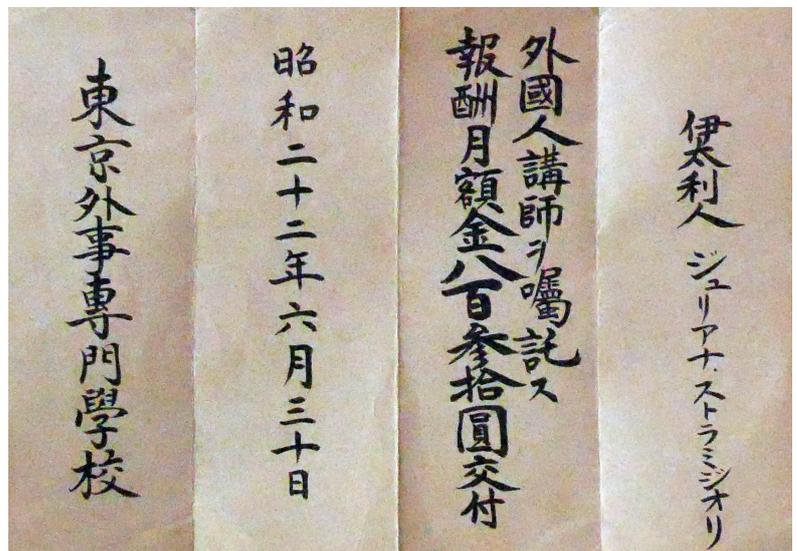


口絵5 法名「精妍」が記された証書 昭和12年2月6日授与 大内みつ蔵



口絵6 東京外事専門学校の証書 大内みつ蔵



口絵7 勲三等宝冠章の宝冠白蝶章と略綬 昭和57年4月29日授与 大内みつ蔵



口絵8 勲三等宝冠章の勲記 昭和57年4月29日授与 大内みつ蔵

日本イタリア文化交流のかけ橋として ——ジュリアナ・ストラミジョーリの事蹟——

渡 邊 一 弘

はじめに

戦後の日本人に勇気を与えた三大ニュース、古橋広之進（一九二八～二〇〇九）の水泳での世界新記録、湯川秀樹（一九〇七～八二）のノーベル物理学賞受賞に続くもう一つのニュースが、黒沢明（一九一〇～九八）監督映画『羅生門』のヴェネツィア映画祭金獅子賞受賞であった。この受賞の背景にジュリアナ・ストラミジョーリ (Giuliana Stramigioli, 1914-1983) という女性の存在があったことは一部の映画ファンの間では知られているが、戦前から戦後にかけて日本とイタリアの関係を結び続けたにもかかわらず、映画『羅生門』との関係でのみ語られることが多く、彼女の生涯をとおして扱った研究は少ない。

最も詳しくまとめているのは、吉村信次郎による「追想・イタリフィウム社」(『イタリア図書』Nuova Serie 33号)¹で、また浜野保樹の『偽りの民主主義 GHQ・映画・歌舞伎の戦後秘史』(角川書店、平成二十年)にも『羅生門』との関連でストラミジョーリについて紹介されている。本稿ではこれらの研究を踏まえ、戦前、戦中、戦後にかけて一人のイタ

リア女性が日本においてどのような状況下で、それぞれの時代において日本とイタリアの文化交流を担ったのかを検討する。

なお、引用に当たっては旧漢字は新漢字にし、旧仮名遣いはそのままとした。彼女の名前の表記は資料によりさまざまであるため、本文ではジュリアナ・ストラミジョーリに統一し、引用はそのままの表記とする。

一、イタリアから日本へ留学

1、イタリア時代

ジュリアナ・ストラミジョーリは、一九一四年八月八日、アブルツツオ州²に生まれた。父イタロ (Italo)・ストラミジョーリは軍人であり、同年七月二十八日に第一次世界大戦が勃発し、翌年五月に出征するが、イタリアとオーストリアの国境トレント県の激戦において二八歳で戦死した³。母ランベルタ (Lamberta) は、その後再婚したが、再び夫を亡くし、女手一つで娘を育てた⁴。

イタリアでは第一次世界大戦直後に東洋学が始まり、昭和八年（一九三三）にジョゼッペ・トゥッチ (Giuseppe Tucci, 1894-1984) 教授

がイタリア中・極東学研究所をローマに設立したことなどから、イタリアにおいて東洋や日本への関心が高まっていた。⁵⁾

ストラミジヨリーは、一九三二年にローマ王立大学文学部東方文化科に進学し、同じアブルツォ州出身のトゥッチ教授のもとで東洋哲学、東洋美術、仏教などを学んだ。日本語については、当時ローマの朝日新聞特派員でローマ大学講師だった前田義徳（一九〇六〜八三、のちにNHK会長）から習得した。学生時代に日本に関する論考を雑誌『アジアティカ』や新聞『イル・ピッコロ』などで発表している。

2、交換学生として来日

ストラミジヨリーは、昭和十一年（一九三六）七月にローマ大学を卒業。同年十一月、イタリア中亜極東協会会長でもあったトゥッチ教授の推薦で、日伊文化協定による日伊交換学生制度の第一回交換学生に選ばれた。この留学の経緯についてはアジア歴史資料センターの「本邦各国間文化交流関係雑件（外務省外交史料館）」に公開されている。昭和十一年七月二十日「件名：中亜極東協会派遣留学生学歴ノ件」⁷⁾に始まり、複数の資料が閲覧できる。留学の条件について記した昭和十一年八月十四日の文書「日伊学生交換協定」⁸⁾によると次の四項目が挙げられている。

一、契約当事者ハ本邦側ハ国際文化振興会（イタ現在国際学友会）伊国側ハ中亜極東協会ノ名義トス

二、日伊両国ハ相互ニ男女各二名宛留学生ヲ交換シ勉学期間ハ二ヶ年トス

三、伊国側中亜極東協会ハ本邦人男子留学生ニ対シ年額一万里ラヲ

支給シ日本側国際文化振興会（イタ現在国際学友会）ハ伊国男子留学生ニ対シ月額百七拾円同女子留学生ニ対シテハ年額二千五百円ヲ支給ス

四、各本国ヨリ勉学地ニ到ル旅費ハ各自派遣者側ニ於テ負担ス

ここには帰国の旅費の条件が記されておらず、そのことがのちに問題となる。

これに先立って行われた第一回交換教授（ローマ大学教授セヴェリ博士と東京帝国大学教授田中耕太郎博士）が好結果をもたらし、イタリア政府では更に日本と留学生の交換が提議され、日本の外務省でも快諾。十一月八月十一日、日伊代表学生男女各二名が選ばれた。⁹⁾

昭和十一年十月八日付『東京朝日新聞』には「ローマ大学出身ストラミジヨリー嬢が既に出発した」とあり、「外交史料館資料」（同年十月十九日）¹⁰⁾には、十一月二日にナポリをコンテ・ロッソ号で出発。上海から神戸か長崎経由で東京に到着後、外務省文化第三課長を訪問し、諸般の指示を受け、京都へ移動するという渡航計画が記されている。このときにトゥッチ博士夫妻も彼女と一緒に来日したと考えられる。

彼女は、十一月二十九日午後四時四十分東京駅に到着、東京鉄道ホテル（現東京ステーションホテル）に宿泊¹¹⁾。しばらく東京日本橋の本町アパートに滞在し、外務省などで事務処理を行った。年が明けた十二年一月十二日に恩師の交換教授トゥッチ博士に伴われ東京を出発したらしく、十二日午後四時二十五分京都駅着の列車で京都に着いた。¹²⁾十八日午前九時、トゥッチ博士夫妻は、京都ステーションホテル（のちの京都センチュリーホテル）に滞在している彼女のもとを訪問し、その後の事に

ついて打ち合わせている。¹⁴⁾

トゥッチ教授は約二ヶ月で日本を去ることとなり、京都帝国大学において一月二十日午後三時、二十一日午後三時の二回にわたって彼による記念講演が行われた。二十一日は「現代イタリア文化に就いて」と題した講演があり、その後、京都帝国大学黒田正利講師（一八九〇～一九七三）の案内で東寺の法要にストラミジョーリも参列、さらに知恩院などを見学した。¹⁵⁾ 彼女がすでに弘法大師全集第二冊目を読んでいることが分かり、東寺管長の松永昇道大僧正（一八六六～一九四二）から毎週一回真言学の特別講義を受けることになる。¹⁶⁾ その第一段階として二月六日に東寺本山内観智院道場で彼女は秘密十善戒を受けることとなった。松永管長は病氣療養中であつたが、遠来の篤学の彼女に同情を寄せ参加することとなった。黒田正利講師に伴われ、定刻二時、管長より式の意義と必要性との説明を受け、将来の不退心についてきわめて懇切なる注意を与えられたうえ、式を厳修し、彼女はイタリア人として初めて日本仏教の灌頂を受け、「精妍」の法名を授けられた。¹⁷⁾ 「口絵5」

彼女は京都帝国大学の黒田正利講師や羽溪了諦教授（一八八三～一九七四）に学び、龍谷大学でも日本の仏教について研究を始めており、当初は龍谷大学へ入学する予定であつたが、学校規定の関係から大谷大学に変更となつた。¹⁸⁾ 京都市上京区（現北区）出雲路松ノ下町の松川すま方¹⁹⁾に間借りして、研究を続けた。

五月四～五日、比叡山中学真島幹事に案内され、比叡山に参拝し、天台の教理に大変なショックを受けた。五日、山麓讚仏堂で天台宗独特の結縁灌頂を受け、今後は天台密教を研究し、真島全性師について「密教綱要」「教理綱要」「教史綱要」の教えを受け、毎週一回ずつ専修院長田

村徳海大僧正より学ぶこととなった。²⁰⁾

五月二十八日夜には、同志社大学ハワイ寮において朝日新聞主催の在日他国留学生との座談会が行われた。²¹⁾ 「写真1」出席者は、「京大Ⅱ廬士謙（医・満）、E・O・ライシャワー（大学院・米）、ビンケンスタイン（文・独）諸君、同大側Ⅱ横側義君（文・ハワイ）、龍大側ⅡG・ストラミヂヨリ（仏教研究・伊）、高工側ⅡV・G・バニケル（インド）、A・N・ラズ（同上）、ハラン・アルガマ（印度支那）諸君他」とあり、ここでストラミジョーリは龍谷大学の学生として紹介されている。ちなみにE・O・ライシャワーは、アメリカの東洋史研究者で後に駐日大使を務めたエドウィン・O・ライシャワーである。当時の日本の学生の生活費は、六〇円が標準だが、生活様式が違い食料品に費用がかかるため、留学生たちは大体一〇〇円内外で、さらに彼女の一ヶ月の生活費は一五〇円以上であると語っている。

昭和十二年（一九三七）七月七日に日中戦争が勃発するが、この後、ストラミジョーリはイタリアの代表としても活躍する。同年八月二日から七日にかけて、東京帝国大学安田講堂で行われた第七回世界教育会議で、イタリア政府から台北帝大のデル・リー教授と彼女の二人が代表に任命された。²²⁾ 同会議はアメリカをはじめ四三ヶ国から千名近い外国人出席者があり、新聞・ラジオでも連日大きく報道された。²³⁾

またイタリアの新聞への彼女の寄稿が話題となつた。²⁴⁾ 十二年十月十一日付『読売新聞』に、

「日本が支那と戦ふのは領土侵略の目的でなく共産党の魔手排撃と日支提携、東洋平和確立のための聖戦である」と長文の論文をロー



写真1 同志社大学での他国留学生との座談会(右端はエドウィン・ライシャワー) 昭和12年5月28日 大内みつ提供



写真2 大阪中央放送局(現日本放送協会)でのラジオ出演 昭和12年11月21日 大内みつ提供

マ発行の有力新聞『ガイド』紙に寄稿、それが六日付の同紙一面に大々的に掲載され非常なセンセーションを巻き起してゐると十日堀田駐伊大使から公電があつた。

この記事が掲載された⁽²⁵⁾。このように当時の外国人留学生は母国へメッセージを伝える役割を担っていたといえよう。

昭和十二年十一月、イタリアが加盟して日独伊防共協定が成立するが、このことについても「感激の瞳潤ませる 若き伊国の女性学徒 その夜“お芽出度う”も日本語で 京大のストラミ・ヂョリー嬢」との記事で彼女は取材を受けている⁽²⁶⁾。また京都帝国大学伊太利亜会の主催で防共協定成立の記念講演会が十一月二十日午後六時半から楽友会館において開催された。内容は中川牧三講演『歌劇の将来性』とストラミジョーリのダナンチオの詩の朗読等であつた⁽²⁷⁾。翌日には大阪中央放送局（現日本放送協会）でラジオに出演している。「写真2」

十一月二十八日には、駐日イタリア大使アウリツチらを迎えて、日独伊三国防共協定の成立祝賀の催しが大々的に京都岡崎勸業館で行われた。二十九日午前十時から京都ステーションホテルの一室で、黒田正利講師と京都商工会議所副会頭竹下藤次郎と彼女の三名で、「日伊提携の将来について重要協議」が行われ、日伊協会を日本で初めて京都の地に設立したいという提案がなされた。このとき、彼女は日本の満州国建設について「イタリアが満州国を承認したことはそれによつて日本とイタリアの関係を一層深めるものと思ひます、そしてこの満州国の承認によつて日本とイタリアの間の文化や政治、経済の關係が更に新しい友情の上に堅く結ばれ深められて行くものと信じ大變うれしく思ひます」と取

材に答えている⁽²⁸⁾。また、この時に訪問した京都市立第一商業学校（現京都市立西京高等学校）の書庫で「伊太利侯爵カルローネンブリー・ゴンザガ氏」の署名の本が彼女によつて発見された⁽²⁹⁾。

昭和十三年（一九三八）二月十一日には、大阪北浜の野田屋（現青山ビル、大阪市中央区伏見町）で大阪外国語学校（のちの大阪外国語大学、大阪大学外国語学部）の日伊学生交歓会が催された⁽³⁰⁾。徳尾俊彦（一八八七—一九四二）教授をはじめイタリア語を学ぶ学生ら約三十名が集まり、彼女を囲んで防共や文学について歓談し、蒔絵の美しい扇が記念に贈られた。

このほか、同年三月に来日したイタリア使節団を歓迎し、「日本と伊太利との精神文明交通」を新聞に寄稿している⁽³¹⁾。五月十日の「外交史料館資料」には「今般余暇ヲ利用シテ右研究ノ為朝鮮及北支ニ旅行シ右終了後本邦ニ帰来スルモノナリ」とあり、日中戦争の最中、朝鮮や中国にも旅行したことが分かる。

3、留学の終わり

昭和十一年十一月二十九日の来日に始まつたストラミジョーリの二年の留学は、十三年十一月の予定が前倒しとなり、急遽八月に帰国することとなる。彼女の緊急帰国の理由は定かではないが、帰国は認められ、八月に入つて帰国準備が着々と進められた。昭和十三年七月二十日の「在京伊太利大使館発の口上書」⁽³²⁾には、「其ノ後任トシテ理学士「フォスコ・マライニ」氏 (Monsieur Fosco Maraini docteur en sciences naturelles) ヲ指名シ同人ハ来ル十一月伊太利ヲ出発スヘキ旨国際学友会当局へ移牒方並ニ依頼スルノ光荣ヲ有ス」とフォスコ・マライニ

(1912-2004)の名が登場する。マライーニは、文化人類学者、写真家、登山家で、この後北海道帝国大学でアイヌ研究を、京都帝国大学でイタリア語を教えるが、十九年には愛知県で抑留されることになる。

華道御室流宗家那須容和は、日独伊三国防共協定成立の感激と国際交歓、日本華道の精神を伝えるため、ドイツのヒトラー総統、イタリアのムッソリーニ首相に花瓶を贈呈することとなった。八月一日午後一時から仁和寺でその贈呈式が行われ、那須氏から近く帰国するストラミジョーリへ伝達され、彼女からムッソリーニ首相へ渡されることとなった。⁽³⁴⁾

ところがここに来て、帰国の旅費の支払いをどこが払うかが問題となる。最終的には当分例外として帰国旅費は滞在国側が負担することとなった。「外交史料館資料」には、昭和十三年八月三日から九月十四日までの帰国に関する資料が掲載されている。⁽³⁵⁾

彼女は「飛鳥時代の彫刻」「真宗教」の論文を完成させ、「聖徳太子に就いて」と題して東京のJOAKラジオ（社団法人東京放送局。現日本放送協会）で日本語による講演を放送した。八月四日には外務省主催により帰国のお祝と送別を兼ねて東京の星ヶ岡茶寮で宴が催された。⁽³⁶⁾

八月十日午後三時から京都ホテル（現京都ホテルオークラ）で京都帝国大学とイタリア関係の各種団体が連合して盛大な送別茶会が催され、八月十一日午後四時から都ホテル（現ウエスティン都ホテル京都）で京都日伊協会の創立委員会が開催された。⁽³⁷⁾

八月十三日午後十時四十八分の京都発下り列車で長崎に向い、船で上海に渡り、八月十九日には「上海出帆ノ伊国船「コンテ・ピアンカマノ」号」⁽³⁸⁾でイタリアに帰国している。

彼女は帰国後、ナポリ東洋大学の日本語講師となり、研究を続けた。⁽³⁹⁾昭和十四年三月二十三日に日伊両国間で日伊文化協定が締結され、⁽⁴⁰⁾国際仏教協会ではこれを祝して、両国の仏教研究の交換を目的とした『日伊仏教研究』を出版することになった。イタリア側は、ローマ大学のジュゼッペ・トゥッチ博士、ナポリ大学のジュゼッペ・ロレンツォ博士とストラミジョーリが寄稿した。⁽⁴¹⁾

二、再来日から終戦まで

1、再来日

帰国から一年も経たないうちに、ストラミジョーリは再び来日を希望する。昭和十四年六月十日の文書には、⁽⁴²⁾

日本文化研究継続ノ為今年秋是非再ヒ渡日一、二年滞在シタキ意向（往復旅費自弁）ナル処当方トシテハ本邦ニ於テ何等就職ノ目当無クシテ漫然出発スルノ不可ナルヲ説示シ居ルモ例ヘハ日伊学会事務員音楽学校ノ伊語教授又ハ放送員等適当ノ地位アラハ好都合ニ付右斡旋ノ上何分ノ儀本月中ニ御回電ヲ請フ

とあり、外務省へ一、二年の滞在を希望したが、外務省は就職することが条件であることを伝え、音楽学校等への就職を別紙で斡旋している。彼女は新聞の取材に「帰国後も日本人の優しい心や日本の美しい風景が忘れられず一生を日本で過したいから何とか希望を叶へて頂きたいとの熱情をペンに託し、日本訪問の願書を二十八日わが外務省文化事業部に

送つて来た」と永住希望を語っている。⁽⁴³⁾ 再来日の希望に対して外務省は、昭和十四年六月三十日及び七月五日の文書を経て、七月十日の文書で「日伊文化協定追加予算中ヨリ貴会名義ニテ本邦ニ於テ適當ナル就職口アル迄ノ期間（限度ヲ一ケ年トス）月額二百五十円ノ奨学金ヲ支給シ其ノ研究ヲ助成スルコトナリタル」と、来日を認めることとなった。ストラミジョーリはこの報告を受け早速、昭和十四年七月十一日付『東京朝日新聞』に「忘れられぬ日本」再び来朝するイタリアの女性」との見出しで、「日本は世界で一番美しい一番優れた国です、それから日本の男子は世界で一番立派なサムライです、此の日本で私は一生を日本文化の研究に捧げる事が出来ればどんなに幸福でせうか！」とコメントしている。

奨学金について、昭和十五年、国際学友会は外務省に対し、追加予算で一年分（月額二百五十円也）（限度ヲ一ケ年トス）ヲ本年一月ヨリ十二月迄ノ一ケ年分金三千円也）を依頼したが、最終的には一月から三月迄の分は、外務省から国際学友会に支出されることとなった。⁽⁴⁶⁾ それとともに外務省は、彼女に東京音楽学校のイタリア語教師として就職の依頼をしているが、幸いにもイタリア大使館に勤めることとなった。

2、再来日後の生活

ストラミジョーリは昭和十四年十二月二十六日に再来日する。東京の渋谷区千駄ヶ谷に居を構え、翌年三月頃からイタリア大使館情報部の企画と出版の業務担当職員として働き始めた。その後東京のイタリア文化会館の書記を兼任し、この時、映画「シピオネ」（カルミネ・ガッローネ監督、一九三七年）や「空征かば」（ゴッフフレード・アレッサンドリーニ監

督、一九三八年）、それに多くの戦争ドキュメントの輸入公開を手伝ったことが、戦後イタリア映画の輸入に携わるきっかけとなった。⁽⁵¹⁾

彼女がイタリア大使館職員として最初に携わったのはファシスタ伊太利亞大展覽会の巡回展であった。⁽⁵²⁾

○昭和十五年四月二日、仙台三越（宮城県仙台市）、伊太利亞大展覽會 イタリア大使館・仙台国際協会主催、河北新報社後援。東北大学類教授の案内で展覽会場を視察。⁽⁵³⁾

○昭和十五年五月一日～五月五日、札幌三越（北海道札幌市）。〔写真3〕イタリア大使館主催のイタリア事情展覽會。同時に市公会堂で講演と映画会等を開く予定。イタリア大使館主催、第七師団、北海道大学、北海道庁、札幌市。小樽新聞社、北海タイムス社後援

出品は古代ローマ文化、リットーリオ・イタリヤ青少年団産業、軍備、土地改善、公共事業、植民地、観光の八部門に別れ特別展観としてムツソリーニ氏の巢などがある。⁽⁵⁴⁾

一日午後六時半からは『伊太利の夕』を札幌市公会堂で開催。

「イタリーの女性を語る」というタイトルでストラミジョーリも講演を行っている。このとき、彼女は、北海道帝国大学のフォスコ・マラーニ夫妻と会場で挨拶している。⁽⁵⁵⁾

○昭和十五年五月十五～二十二日、棒二森屋（北海道函館市）⁽⁵⁶⁾

○昭和十五年六月一日頃、小林百貨店（新潟県新潟市）⁽⁵⁷⁾



写真3 ファシスタ伊太利亜大展覽会 札幌三越 昭和15年5月1日 大内みつ提供

昭和十五年七月十一日、伊学協会（明治二十一年（一八八八）設立）と日伊学会（昭和十二年（一九三七）設立）を合併し日伊協会が設立され、さらに同年九月二十七日に日独伊三国同盟が調印されると、彼女はイタリア大使館情報部職員として多忙になる。同年六月十二日付『中外商業新報（朝刊）』で取材を受けたり、同年には『ファッシズムの理念と日伊の政治的提携』（ミルコ・アルデマーニ著、訳述者・藤沢親雄）や『Giappone』（Milano, Garzanti）を刊行した。翌十六年（一九四二）一月四日付『中外商業新報（朝刊）』には、「異国の女性に訊く（三）」特集で紹介され、同年一月十二日発行の大日本国防婦人会編『修養講座 第三輯』に「伊太利の婦人」を寄稿。同年三月の『国際文化』第一三三号（国際文化振興会）には「仏教対談 チュリアアナ・ストラミヂョリー 友松円諦」との記事が掲載された。この年には、『イタリアの女性とファシズモ』（駐日イタリア大使館情報官室発行、昭和十六年二月二十日。イタリア語の表紙にはストラミヂョリー著とある）を執筆しており、『働く伊太利の婦人たち 海外文化資料第一二輯』（財団法人日本文化中央連連盟発行、昭和十六年十二月七日）にも掲載された。なお、昭和十六年四月には京都帝国大学文学部内にイタリア文学および語学の講座が設置され、前述のフォスコ・マラーイーニが教師として赴任している。^⑧

同年九月二十七日には日独伊三国同盟の調印から一周年を記念して、イタリア友の会は「明治天皇の御鴻徳を偲び奉る御製御十首を謹撰、謹訳してヒットラー総統ムツソリーニ首相に贈る」ことになり、その打ち合わせが二十五日午後四時から華族会館で開かれた。^⑨ 佐佐木信綱博士（二八七二〜一九六三）、謹訳の茅野蕭々博士（二八八三〜一九四六）、大類伸博士（二八八四〜一九七五）に加え、イタリア大使館情報部のストラ

ミジョーリ、宗武志伯爵（一九〇八—一九八五）らが出席、謹撰の御十首を決定した。

同年十二月十九日付『国民新聞』には「強い日本軍人を育くむ母の愛情 ストラミジョーリ女史語る」との記事で取材に答えている。昭和十七年（一九四二）三月の『報道写真』第二三号ではイタリアの報道について、昭和十八年四月の『新女苑』七号には「花のすがた」の記事を、「イタリア大使館情報部員」として寄稿している。

3、イタリア降伏後の生活

昭和十八年七月、イタリアではピエトロ・バドリオがムッソリーニを追放して政権を握り、九月八日イタリアは連合軍に降伏した。日独伊三国同盟の一角が崩れ、イタリアは日本の同盟国から一転して敵国になった。九月二十三日、ムッソリーニを元首とするイタリア社会共和国政府が北イタリアに成立したために九月二十七日、日本政府は同国政府を承認し、十月五日、大本営政府連絡会議で「伊国ニ対スル処置調整ノ件」が決定された。これによりイタリア外交官と一般イタリア人に対してファシスト共和国政府に忠誠かどうか審査して、忠誠であると認められる場合および無害と認められる場合は解放し、それ以外は敵国人に準じて取り扱うこととした⁽²⁾。以下、『外事月報』からストラミジョーリの動向を追うこととする。

昭和十八年九月分の『外事月報』（二二三頁）では、イタリア人に対して「公館及在留伊国人は敵国に準じ保護監視すること」という決定措置として、「九月十日憲兵、通信其の他関係各省と協議の結果左の如く決定実施」することが命じられたことが分かる。「公館及公館員」に対して

は、「公館員（使用人ヲ含ム）ニハ原則トシテ昼間公館トノ往復ノミヲ認メ外出ヲ制限ス」「公務員ノ自宅ニアル短波、全波受信機、写真機、望遠鏡、拳銃其ノ他ノ危険物ハ之ヲ仮領置ス受信機ニ就キ許可ヲ受ケタルモノハ其ノ許可ヲ取消ス（通信省）」「許可ナク公館及公館員ノ私宅ニ出入スルコトヲ禁止ス」などが挙げられている。実施状況として、「駐日伊太利大使館員は大使以下三四名にして同大使館に対しては警視庁に於て九月十日大使以下各館員の自家用自動車及自転車は全部大使館に運搬せしめて使用を禁止し、又電話は通信省に於て切断せるが連絡用として九月十三日特に外務省政務局第四課より伊太利大使館に直通電話一本を架設せり」とある。この記録に「ストラミジョーリ」の名があり「情報官秘書」と記され、十八年九月段階では、イタリア大使館の館員であったことが分かる。

昭和十八年十月分『外事月報』（三三頁）には、十月五日に大本営政府連絡会議による「伊国ニ対スル処置調整ノ件」として「伊国外交官、領事館並に在留一般伊国人ノ中各般ノ実情ト審査ノ上新政府ニ真ニ忠誠ナリト認メラルル者及無害ナリト認メラルル者ハ之ヲ解放シ其ノ他ハ夫々敵国外交官、領事館並一般敵国人ニ準ジテ取扱フモノトス」といった条件のもと、宣誓書への捺印が求められた。昭和十八年十月分『外事月報』（八十二頁）には、拒否した者のうち公館員四二名は東京都大森区（現大田区）田園調布の聖フランシスコ修道院に收容されたところ、その名簿にストラミジョーリの名前がないことから、おそらく彼女はこの段階で解放されたものと考えられる。ちなみにこの段階で前出のフォスコ・マライーニ一家は、宣誓書への捺印を拒否し、愛知県愛知郡天白村八事山内天白寮（株式会社松坂屋所有）の收容所へ抑留された。

末常尚志（東京外国語大学昭和二十六年入学）によると、ストラミジヨリは昭和十九年（一九四四）までイタリア文化会館に在籍し、「イタリアが日本に対して、同盟関係の破棄通告をするのは昭和二十年一月である。連合軍に対する降伏から、同盟関係の破棄に至る期間、在日イタリア大使館とイタリア文化会館は存在したわけで、先生が昭和十九年まで、イタリアの降伏後も文化会館に勤務したのはこのような事情によるものと思われる。先生は他の何人かのイタリア人と共に、文化会館内に住んでいた」という。昭和三十二年（一九五七）三月十七日付『日本経済新聞』には、「昭和十八年、イタリア文化会館館長」とのストラミジヨリの経歴が記されている。この時期のイタリア文化会館の館長はミルコ・アルデマーニが昭和十六年（一九四一）から十八年までで、その後は不在となり、次の館長は昭和三十四年からである。昭和十八年に臨時的に彼女が館長となった可能性も考えられるが、イタリア文化会館には彼女が館長になった記録は残されていないとのことである。ちなみにイタリア文化会館は昭和二十年（一九四五）三月十日の東京大空襲で一部被害を受けている。⁶⁵

終戦前後のストラミジヨリの動向については、「在日イタリア人は敵性人となり、箱根に收容される。みじめな数ヶ月であった。女史は母親とともに箱根にいた。」⁶⁶との記述があるのみで、詳細は不明である。戦後の資料であるが「昭和二十年八月二十五日現在 在留外国人名簿 神奈川県」という各国別在留外国人名簿があり、その中にストラミジヨリの名が見える。⁶⁷「足柄下郡仙石原村高原」に「無職 ランベルタ・ストラミジヨリ」「無職 ジュリアナ・ストラミジヨリ」と二人の大使館員とともに計五人の名が記されている。ランベルタは二回目の来日後に日本

に呼び寄せた彼女の母の名であり、大使館員ら複数のイタリア人と仙石原村（現箱根町）で過ごしていた。この段階で彼女は「無職」であり、大使館職員ではない。多くのイタリア人は温泉村（現箱根町）富士屋ホテルに收容されており、その他、仙石原村では富士屋ホテルのゴルフ学校に收容されていた。

このあと昭和二十年九月から二十二年六月までのストラミジヨリの足跡をたどることはできない。

三、イタリアフィルム社の設立まで

1、イタリア語の講師

ストラミジヨリは、昭和二十二年（一九四七）六月三十日から東京外事専門学校にイタリア語の「嘱託外国人講師」として勤務する。「口絵6」報酬月額は八三〇円で、契約は一年毎に更新され、二十五年三月三十一日までとされた。二十四年五月三十一日に東京外事専門学校は東京外国語大学となり、旧制「イタリア科」は新制「イタリア学科」となった。彼女は同年六月一日付で東京外国語大学「伊語担任の外国人教師」、二十八年四月一日からは「イタリア語担任の外国人教師」となり、三十年三月三十一日まで契約が更新された。それ以降の契約形態は不明だが、昭和三十九年度の途中まで、彼女は「イタリア語担任」を引き受けた。⁶⁸週二回の午前中だけの講義であった。当時の大学生活の様子については、荒谷次郎が詳細に記している。⁷⁰

2、イタリアフィルム社設立

昭和十六年十二月八日の開戦後、アメリカは敵国となり、十二月七日限りでアメリカ映画は全国の興行市場から姿を消し、各地の洋画専門館はドイツ、フランス、イタリア等の非敵国映画上映に切り替えた。⁽⁷¹⁾

戦後、外国映画の状況は一転する。昭和二十一年、二十二年は、GHQ(連合軍総司令部)の管理により、アメリカ映画が日本市場を独占した。⁽⁷²⁾ 他国からの要請もあり、GHQは二十一年十二月、一国一社に限り輸入業務を認めた。二十二年八月に英国映画協会(BFI)が創立されたが、日本での配給の方法は、東宝と契約し、封切以後の全国配給をNCC(ニッポン・シネマ・コーポレーション)に委託するという形をとった。⁽⁷³⁾ このような状況のもと、ストラミジョーリはイタリア映画の配給に乗り出すこととなる。

昭和二十四年(一九四九)二月、ストラミジョーリはイタリアフィルム有限会社を創立する。⁽⁷⁴⁾ 当時外国映画の輸入は、戦勝国のみ許可されていたが、結果的にイタリアは戦勝国の一員となったことでイタリア映画の上映も認められた。彼女は戦時中にイタリア文化会館で映画の仕事を経験しており、映画界に知人もいたことや、東京外国語大学の卒業生、中村二郎と加藤亨の呼びかけもあって輸入会社の設立を決意した。とくに中村は、戦時中にイタリア文化会館でイタリア語を学び、彼女に深く信頼されていた。中村二郎(昭和二十年露語卒)は主に宣伝、配給を担当。加藤亨(二十五年伊語卒)は総務経理を一手に引き受けた。その後、戸村隆(二十八年伊語卒)、中村幹(経理)、村田文江(秘書。元日比谷出版社社員)、金倉淑子(外交官夫人でストラミジョーリの親友。経理)、吉村信次郎(二十九年伊語卒。二十七年に翻訳のアルバイト、のちに社員となつ

た)らが順次入社した。はじめは麻布仲ノ町(現港区六本木三丁目)のストラミジョーリの自宅を事務所としたが、のちに港区芝田村町(現西新橋)に正式な事務所を構え、二十八年に日活国際会館(千代田区有楽町)に移った。

イタリアフィルム社の第一作は「戦火のかなた」(ロベルト・ロッセリーニ監督)で、昭和二十四年九月一日に東宝有楽座で特別公開し、九月六日より上映した。イタリアフィルム社は、輸入業務を主とし、配給は東宝に委託した。⁽⁷⁵⁾ 昭和二十五年の公開映画は「無法者の掟」(ピエトロ・ジェルミ監督)、「靴みがき」(ヴィットリオ・デ・シーカ監督)、「荒野の抱擁」(ジュゼッペ・デ・サンティス監督)、「自転車泥棒」(ヴィットリオ・デ・シーカ監督)、「無防備都市」(ロベルト・ロッセリーニ監督)の五作品であった。ストラミジョーリは、昭和二十五年十月の『キネマ旬報』で「イタリア映画を語る」と題して、「映画はやはりブラック・アンド・ホワイトであることが正しいという理論を多く人が多くなっている。例えばロッセリーニやデ・シーカの作品は、その本質から見ても色彩映画にすれば却つて不自然だというのである」とモノクロ映画に対するこだわりを語っている。⁽⁷⁶⁾

四、映画界での活躍

1、『羅生門』の受賞

昭和二十五年八月二十六日に大映が公開した黒沢明監督『羅生門』が、翌年九月十二日に第十二回ヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞(グランプリ)を受賞する。この受賞はストラミジョーリが『羅生門』を大映に

推すことから始まるが、それについて彼女は次のように説明している。⁷⁷⁾

「一通り拝見した映画は『雪夫人絵図』『羅生門』『偽れる盛装』『野良犬』『酔いどれ天使』『暁の脱走』などでしたが、この中で『羅生門』には非常に驚異を感じました。賞を得られるかどうかはともかくとしてこれは相当の話題を呼ぶことは確かだと感じました。テーマの扱い方、描き方、その映画に流れている精神と人間性ということも十分優れていると思いました。」

イタリフィルム社がどのように関わったかについては吉村信次郎（前出）の証言を引用する。⁷⁸⁾

事の次第は、ストラミさんが「羅生門」という面白い映画があるので、これをヴェネツィア映画祭に出品したいと言いつ出したことに始まる。そこで「羅生門」の制作会社大映に話を持ち掛けたが、全く非協力的であった。ようやく大映からポジプリント一本を提供してもらったので、『映画評論』に掲載された台本をもとにストラミさんが出品に合わせようと大急ぎでイタリア語に翻訳を始めた。加藤亨もその翻訳を手伝った。手続き作業は全てイタリアフィルムで行い、イタリア語版フィルムパンチ代、及び送料も全額イタリアフィルム持ちであった。大映の窓口は専務だった曾根正史氏、この人の尽力で出品できた。ストラミさんに見る目があったということなのだろう。「羅生門」はヴェネツィア映画祭で見事グランプリを受賞するのである（昭和二十六年九月十二日）。日本人の誰も

永田社長も黒沢明も出品さえ知らなかった快挙であった。すると受賞とその意味を知らされた大映の永田社長がさも自分が積極的に製作されたように宣伝した上、イタリアでの配給権はイタリアフィルムに譲渡するが、残りのヨーロッパもアメリカも全部大映で配給するとストラミさんに言い出した。ストラミさんは教育者で商売つ気が無かったのですぐにそれを承知してしまった。グランプリ受賞はストラミさんの苦勞の結果なのだから、ヨーロッパの半分でも配給権をもらえればよかったのに。そうすれば御殿が建っているよ、とは加藤亨の談である。

この黒沢明監督『羅生門』の金獅子賞受賞については、当時も多くの記事が紹介されている。⁷⁹⁾この経緯について最も詳しく研究していたのが、メディア学者の浜野保樹であった。『偽りの民主主義 GHQ・映画・歌舞伎の戦後秘史』（角川書店、平成二十年）には受賞までの経緯がまとめられており、『大系 黒沢明 第一巻』（浜野保樹編・解説、講談社、平成二十一年）では受賞に関する貴重な文書資料が紹介され、受賞経緯の詳細を知ることができる。一方、古賀太はこの経緯を「ストラミジョーリ神話」と表現し、昭和二十六年のカンヌ映画祭に『羅生門』が推薦の候補に挙がっていたことからストラミジョーリの受賞の貢献度について疑義を唱えた。⁸⁰⁾この件についてここで詳しく検証することはできないが、次の資料はストラミジョーリのヴェネツィア映画祭への積極的な働きかけがあったことを示している。⁸¹⁾「写真4」

今度一九五一年八月二十日より九月十日迄イタリアのヴェニスにお

いて、戦後第四回目の国際映画「コンクール」が開催されることに決定を見ましたが、同「コンクール」には戦前日本よりも優秀映画を選定し参加して居りましたことはご承知の通りであります。

この機会に再び日本が参加しますことは、国際文化の交流上非常に有意義と存ぜられます。つきましては右「コンクール」に貴協会の参加を得度く存じますから宜敷く御願ひ申し上げます。

昭和二十五年十二月二十五日

イタリア・フィルム社社長

ジュリアーナ・ストラミジョーリ

日伊協会理事長

矢代幸雄

日本映画連合会事務局長

池田義信殿

昭和二十五年十二月という早い段階で、日本映画連合会に対してヴェネツィア映画祭への参加を提案していなければ、出品そして受章にはつながらなかったかもしれない。

2、イタリアフィルム社の活躍

昭和二十六年五月、外国映画の輸入統制に関する権限がGHQから日本政府に委嘱された。取扱い官庁である大蔵省は、輸入方針の急激な転換は時期尚早として一時保留し、二十七年度は、前半期に暫定処置とし

今般一九五一年八月二十日より九月十日迄イタリアのヴェニスにおいて、戦後第四回目の国際映画「コンクール」が開催されることに決定を見ましたが、同「コンクール」には戦前日本よりも優秀映画を選定し参加して居りましたことは御承知の通りであります。
この機会に再び日本が参加しますことは、国際文化の交流上非常に有意義と存ぜられます。つきましては右「コンクール」に貴協会の参加を得度く存じますから宜敷く御願ひ申し上げます。
昭和二十五年十二月二十五日

イタリア・フィルム社社長

ジュリアーナ・ストラミジョーリ

日伊協会理事長

矢代幸雄

日本映画連合会事務局長

池田義信殿

写真4 日本映画連合会事務局長宛文書資料 大内みつ蔵

て全体で一〇四本を割当て、八月十四日になって、同年度総本数の割当てを発表した。年間総本数は二〇八本で、国別割当はアメリカ一五二本、イギリス一四本、フランス一〇本、イタリア四本、西ドイツ三本などとなった。輸入割当の有資格者にイタリアフィルム社は入っていた。⁸³⁾

ストラミジョーリは、日本とイタリア映画界との人脈を着々と築き上げていく。昭和二十七年十月から十一月にはイタリアに行き、デ・シーカ監督に会い、次年度上映する映画の打ち合わせ等を行った。⁸⁴⁾二十八年二月末から四十日ほどイタリアに滞在し、三月二十二日にはナポリ近くのマイオリでロッセリーニ監督とイングリッド・バーグマン夫妻らと会うなど、イタリア映画界との交流が報道された。⁸⁴⁾さらに時の人として取



写真5 映画のロケを見るロベルト・ロッセリーニ監督とストラミジョーリ 昭和28年3月 大内みつ提供

材を受けている。⁽⁸⁵⁾ 「写真5」

3、イタリア映画祭の開催

昭和二十九年七月に日伊文化協定が締結され、よりいつそう日伊の交流が進んだ。映画界では、この協定締結後初の催しとして、第一回イタリア映画祭が開催される⁽⁸⁶⁾。同年十二月に、イタリア外務省国際文化局映画課長ルチャーノ・コンティとウニタリア・フィルム（イタリア映画海外普及機関）宣伝部長が来日し、ストラミジョーリとの間で打ち合わせが行われた。開催日附近の昭和三十年四月三日には、イタリアから女優シルヴァーナ・パンパニーニをはじめ、ウニタリア・フィルム事務局長、宣伝部長、国際映画祭審査委員長、フィルム・ライブラリー会長の五名の使節団が来日し、舞台挨拶やレセプションを行った。前夜四月六日に帝国ホテルで開催されたレセプションでは、参会の婦人たちにイタリアから持参した郷土人形がそれぞれ一体ずつ贈られ、イタリア代理大使ガリエーニ候から、松竹会長大谷竹次郎、東宝社長小林一三、映画評論家飯島正にイタリア共和国勲章が贈られた。

〈第一回イタリア映画祭〉

時期…昭和三十年四月七日〜十三日。

共催…ウニタリア・フィルムと在日イタリア大使館。

会場…東京宝塚劇場と帝国劇場（宝塚劇場は戦後アーニー・パイル劇場として接収され再出発の催しだった⁽⁸⁷⁾。一月に返還、改装され、開館の前一周をとくに小林富佐雄の好意で貸してくれた⁽⁸⁸⁾。東京の次は大阪のガスビルが会場となった）

上演作品…四月七日「ナポリの饗宴」、八日「道」、九日「大いなる希望」、十日「青い大陸」、「パンと恋と夢」、十一日「リコルデイ家」、十二日「ウンベルトD」、十三日「蝶々夫人」。
特別出品…十四日「されどわが愛は死なず」、十五日「アッスンタ・スピーナ」、十六日「カビリア」。

4、ローマでの日本映画週間

昭和三十一年（一九五六）には、日本で開催されたイタリア映画祭に對する返礼として、ローマで日本映画祭が企画された。主催はイタリア政府とウンタリア・フィルムで、日本の外務省と駐伊日本大使館が協力となり、三月十二日〜十八日まで「日本映画週間」が開催された。⁽⁸⁸⁾ 日本映画連合代表として小林富佐雄東宝社長と、女優の高千穂ひづる、矢島ひろ子、青山京子が振袖姿で参加した。「幻の馬」「この広い空のどこかに」「くちづけ」など劇映画七本、短編六本が上映された。⁽⁸⁹⁾

5、第二回イタリア映画祭

昭和三十三年には、イタリア映画祭が三年ぶりに開催された。⁽⁹¹⁾ 第二回イタリア映画祭には、使節団としてウンタリア・フィルム事務局リディオ・ボッチーニをはじめ、女優ロッサナ・ポデスタ、フランカ・ベッティーヤ、ポデスタの夫で監督兼プロデューサーのマルコ・ビカリオ、ディーノ・リージ監督らが来日した。

〈第二回イタリア映画祭〉

時期…昭和三十三年四月一日〜八日

会場…東京有楽町の読売ホール（次の会場は大阪ABCホール）。
上演作品…四月一日「わらの男」、二日「パンと恋と……（殿方ごろし）」、三日「挑戦」、四日「パリオ祭の娘」、五日「フォルトウネラ」、六日「ベニスと月とあなた」、七日「さすらい」

昭和三十四年度の全輸入劇映画本数は前年度より三一本増の二一〇本と大幅に増えたが、配給収入は減収となった。アメリカ映画の不振に加えて、日本映画の二本立て攻勢、テレビの普及などが影響していた。輸入割当制度の改変により配給業者が急増し、全般的に輸入本数は増えた。取扱い官庁の大蔵省では昭和三十五年度から輸入専業者への配分を行わない方針が示され、その準備期間である三十三年から三十四年にかけて、新規業者が創業したり、イタリフィルム社のように機構拡大を図る業者もあつた。⁽⁹²⁾

6、イタリフィルム社創立十周年

イタリフィルム社は、昭和二十四年九月に有楽座で「戦火のかなた」を封切ってから六〇本のイタリア映画を公開してきた。この間、東宝、松竹、NCCとの共同配給を経て、三十三年十一月には関東、関西両支社を開設し、自主配給を開始した。三十四年十月、新たに中部、九州、それに北海道支社が設立された。スタッフは六十名を超える大所帯となつていた。⁽⁹³⁾

イタリフィルム社は三十四年十月に十周年を迎え、十月十三日午後五時から芝の光輪閣において、創立十周年記念パーティが開催された。「写真6」高松宮夫妻、田中耕太郎最高裁長官、イタリア大使館関係者をは



写真6 イタリアフィルム社創立十周年記念写真 昭和34年10月13日 大内みつ提供

じめ、映画および興行者が約五百名出席した。また、彼女は、映画を通じて日伊文化交流に寄与した功績で、イタリア共和国功労ナイト章が駐日イタリア大使マウリリオ・コッピニから授与された。⁹⁴

五、映画界からの引退、そして帰国

1、イタリアフィルム社の衰退

昭和三十三年（一九五八）九月から、配給をめぐる法令が改正され、外国映画の輸入配給を許可される業者は自己の配給網を持つている業者に限られるとされたため、イタリアフィルム社では、同年九月に自主配給を開始し、セールスマンなどを多数採用した。それまでは輸入専業で、配給は松竹やNCCなどの大手配給業者に任せていた。クォータといって輸入本数制限もあり、その制度が一種の保護作用をしていた。しかし自主配給にともなう経費増、その後のクォータ制の廃止などに加えて、対抗業者の出現によるイタリア映画の取得費の高騰などがあり、さらに映画離れもあつて、イタリアフィルム社の業績は急速に悪化した。⁹⁵ 同年十一月には営業部長が河合淳、宣伝部長が中村二郎となった。⁹⁶

そんな状況のなかでも東京外国語大学のイタリア語講師の職を辞めることなく生徒を教えていた。しかしイタリア映画にも商売目当てのB級作品が増えて、文化交流に益するどころか妨げるのではないか、これが私の職業かとストラミジヨリは悩んだという。

会計を預かった加藤亨はドル送金のために苦勞を重ねていたが、ついにストラミジヨリと意見が対立し、昭和三十六年（一九六一）六月に退職した。彼女は当時日本に支社を作ったオリベット社に若いセール

スマンを売り込み、ほぼ全員を就職させた。吉村信次郎は同年三月末に東宝東和に移籍した。

翌三十七年三月、家を売ってまでしてテコ入れたが、結局自己資本では経営不能となり、元大映専務の曾我正史（NCC元会長、大映元専務取締役）にイタリフィルムの営業権を譲渡し、曾我は三十八年七月に「東京第一フィルム」を設立する。大西という社員は、昭和三十九年まで東京第一フィルムで残務整理を終えて十月にオリベッティ社へ入社した。その日をもってイタリフィルム社はその歴史的役割を終えた。⁹⁷⁾

2、帰国及び帰国後の活動

ストラミジョーリは、昭和三十九年（一九六四）、東京オリンピックをみることなく、母と大内みついと犬のトビを連れて日本を離れた。就労ビザの関係でこのとき大内を養女とした。ローマのヴィア・アルキメーデに居を構えた。当時の前田義徳NHK会長からの推薦もありNHKローマ支局の顧問となり、⁹⁸⁾ 翌年にローマ大学サピエンツァ校およびイタリア中亜極東協会の教授に就任した。ローマ大学では日本文学と日本語を教え、『保元物語』『平治物語』『将門記』など翻訳や研究を発表している。

昭和五十七年には、国際交流基金のフェローに選ばれ、二ヶ月ほど滞日したが、その際の研究テーマは「平安後期—鎌倉初期における文化と社会」であった。⁹⁹⁾ その後も日本ペンクラブ、国際交流基金などの招待でたびたび来日している。なかでも国文学研究資料館とは交流が深く、五十一年八月二十七日、五十七年十月二日に来館しており、十周年の言葉も寄せている。¹⁰⁰⁾

昭和五十七年四月二十九日には勲三等宝冠章を授与される。「口絵7・

8」六十三年四月にはローマで日伊協会の岡野賞を受賞したが、すでに病床にあり出席できなかった。¹⁰¹⁾

三ヶ月後の七月二十五日午前六時半、ストラミジョーリは心臓病のためローマの自宅で死去した。七三歳であった。この一報は日伊協会経由で日本にも伝えられ、新聞各社が報じた。¹⁰²⁾ また『日伊文化研究』や『イタリア図書』には追悼記事が寄せられた。¹⁰³⁾

終わりに

昭和七年に入学した大学において東洋文化、なかでも日本文学や仏教美術の研究に着手したストラミジョーリは、日中戦争勃発前の十一年に第一回交換学生として初来日した。留学中に日中戦争が始まり、学生という身分でありながら、日本を賛美する原稿を書いたり、インタビューを受け満州国建設について賛同したり、イタリアの代表としての役割を担わされることもあった。そのような状況下でも彼女は勉学にいそしみ、二年後に論文を書きあげ、留学期間を終えて一旦帰国する。だが、日本への関心を押さえきれずに、困難な手続きの末、再来日を果たす。

昭和十五年三月からはイタリア大使館職員としてファシスタ伊太利亜大展示会を企画し、戦時中の日本とイタリアのかけ橋となるべく活動する。この展示会においてストラミジョーリは第二回交換学生のアスコ・マライーニと出会っている。この二人は日本とイタリアの交流を担う若者として活躍するが、イタリアが連合軍に降伏することで違う道を歩むことになる。ストラミジョーリはファシスト党を支持することで解放され、マライーニは支持しないことで名古屋に抑留されることとなった。

戦後、ストラミジオーリは語学教師として再出発するが、ファシストとしての戦時中の活動について触れることはなかったという。二十四年二月からはイタリフィルム社社長として、映画産業と映画文化の面で活躍をした。なかでもベネツィア国際映画祭へ黒沢明監督映画『羅生門』の出品に尽力し、金獅子賞受賞の影の立役者となった。イタリフィルム社は、日本映画の輸出とともに多くのイタリ映画を輸入すること、日本映画に大きな影響を及ぼした。やがて配給するイタリ映画の質の低下やビジネス面での困難が重なり、三十九年に離日する。帰国後は大学において日本文化研究を再開し、日本のすばらしさをイタリアの学生たちに伝えることで、ストラミジオーリはその生涯をかけて日本とイタリアのかけ橋となったのである。

本稿では、フォスコ・マライーニについて触れることはできなかったが、彼は昭和二十一年にイタリアへ家族とともに帰国、二十八年に再来日し、日本各地を調査し、多くの写真や映像記録を残している。ストラミジオーリとマライーニは、戦後日本とイタリアの文化交流を築いた双璧であり、今後はマライーニの活動を改めて検討することで、この二人が果たした役割を見直していくことが課題であろう。

〈注〉

- (1) 『イタリア図書』Nuova Serie 33号、イタリア書房、平成十七年十月二十八日。この記述に関しては平成十八年八月五日に加藤亨氏により加筆訂正されたメモをイタリア書房伊藤道一社長より提供を受け、それを反映させている。
- (2) 東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史―独立百周年（建学百二十六年）記念―』東京外国語大学、平成十一年、六四四頁。
- (3) 昭和十五年六月十二日付『中外商業新報（朝刊）』。

(4) 浜野保樹『偽りの民主主義 GHQ・映画・歌舞伎の戦後秘史』角川書店、平成二十年、一七九頁。

(5) フォスコ・マライーニ「イタリアの日本研究」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』一〇、国際日本文化研究センター、平成六年、一一八頁。

(6) 末常尚志「ストラミジオーリ先生をしのんで」『日伊文化研究』二七、日伊協会、平成元年、七七頁。

(7) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04011335100（第二画像目）、本邦各国間文化交流関係雑件（外務省外交史料館）。

(8) 前掲注7（第一三画像目）。

(9) 昭和十一年八月十二日付『東京朝日新聞』「伊国遊学の金的を射る」。

(10) 前掲注7（第五画像目）。

(11) 昭和十一年十一月三十日付『国民新聞』。この他、同年十一月三十日『東京日日新聞』「日伊交換学生来朝」にも同様の記事がある。

(12) 昭和十二年一月九日付『報知新聞』「美しいカドマツ」。

(13) 昭和十二年一月十四日付『京都日日新聞』「伊国から麗眸の使節」。

(14) 昭和十二年一月十九日付『大阪毎日新聞』「トウチ博士夫婦が真言密教を研鑽」。

(15) 昭和十二年二月五日付『京都帝国大学新聞』「伊国の文化を語り」。

(16) 昭和十二年二月七日付『京都日出新聞』「真言密教に精進」。

(17) 昭和十二年二月八日付『京都日日新聞』「伊人・初の灌頂」。

(18) 昭和十二年二月十日付『龍谷大学新聞』「イタリー文化を語るチユリアン嬢」。

(19) 昭和十二年十一月七日付『大阪毎日新聞』「感激の瞳潤ませる若き伊国の女性学徒」。

(20) 昭和十二年五月八日付『大阪朝日新聞』「碧眼の日伊交歓女学生が天台密教を研究」。

(21) 昭和十二年六月二日付『大阪朝日新聞（京都版）』「ニッポン」の学校と社会をどう見る？」。

- (22) 昭和十二年八月四日付『東京朝日新聞』「抗暑」の世界教育会議第二日。
- (23) 後藤乾一「第七回『世界教育会議』と大島正徳—戦間期国際交流史研究の視点から—」『アジア太平洋討究』五、早稲田大学アジア太平洋研究センター出版・編集委員会、平成十五年、二頁。
- (24) 前掲注7（第七画像目）
- (25) この文章は後日「支那事変から見た日本と日本人の態度」と題して昭和十二年十月十五日付『中外日報』に掲載された。
- (26) このほか昭和十二年十一月七日付『大阪毎日新聞』「共産主義は文化の敵です」。十一月七日付『京都日出新聞』「可憐なキモノ姿で母国の参加に拍手!」。十一月九日付『中外日報』「母国の参加に歓声」に紹介されている。
- (27) 昭和十二年十一月十八日付『染織商工新聞』「伊太利会講演」。
- (28) 昭和十二年十一月三十日付『京都日日新聞』「提携の熱意凝つて京に生れる日伊協会」。
- (29) 昭和十二年十二月十三日付『京都日日新聞』「五十年前一商の教壇にゐたぞ! 伊太利侯爵」。
- (30) 昭和十三年二月十二日付『大阪朝日新聞』「贈る親善の舞扇」。同日付『大阪毎日新聞』「日伊学生交歓の夕」にも同様の記事が掲載されている。
- (31) 昭和十三年四月三日付『中外日報』。
- (32) 前掲注7（第八〜九画像目）。
- (33) 前掲注7（第一九〜二〇画像目）。
- (34) 昭和十三年八月二日付『大阪朝日新聞』「伝へる華道精神」。
- (35) 前掲注7（第二二画像目）昭和十三年八月三日、件名…日伊交換留学生二関スル件。（第二一画像目）昭和十三年八月四日、件名…日伊交換留学生後任者二関スル件。（第一八画像目）昭和十三年八月八日、件名…国際学友会招致ノ伊国留学生「ジュリアナ、ストラミジョーリ」嬢帰国ニ関スル件。（第二二画像目）昭和十三年八月十九日、件名…日伊交換学生二関スル件。（第二三〜二四画像目）昭和十三年八月二十三日、件名…日伊交換学生二関スル件。（第二五画像目）昭和十三年八月二十三日、件名…「ストラミジョーリ」嬢帰国旅費ニ関スル件。（第二七〜二八画像目）昭和十三年八月二十三日、件名…「ストラミジョーリ」嬢帰国旅費ニ関スル件。（第三〇〜三三画像目）昭和十三年九月十四日、件名…日伊交換学生二関スル件。
- (36) 昭和十三年八月五日付『東京朝日新聞』「若き血潮傾けて二年」。
- (37) 昭和十三年八月九日付『大阪朝日新聞』「日伊協会愈よ十一日創立委員会」のほか、昭和十三年八月十一日付『京都日日新聞』「故郷へ伝へん日本の文化」、同日付『大阪毎日新聞』「惜別の花束の雨」にも紹介されている。
- (38) 前掲注7（第二三〜二四画像目）。
- (39) 前掲注6、七七頁。
- (40) 「座談会回想…日伊協会の歩み」『日伊協会史 一九四〇〜一九九三年の歩み』日伊協会、平成五年、一五三頁。
- (41) 昭和十四年二月三十一日付『東京朝日新聞』「日伊仏教研究発刊」。
- (42) 前掲注7（第三三画像目）。
- (43) 昭和十四年六月二十九日付『東京日日新聞』「生涯をぜひ日本で」。このほか七月十一日付『大阪朝日新聞』「も一度夢の日本へ」、同日付『読売新聞（夕刊）』「往くもの来るもの日伊学徒の向学心」でも紹介された。
- (44) 前掲注7（第三五画像目）。
- (45) 前掲注7（第三六画像目）。
- (46) 前掲注7（第三八画像目）。
- (47) 前掲注7（第四〇画像目）。
- (48) 前掲注7（第四〇〜四一画像目）。
- (49) 前掲注7（第四二〜四三画像目）。
- (50) 昭和十五年六月十二日付『中外商業新報（朝刊）』「今ぞ祖国の進軍」。
- (51) 『イタリア図書』Nuova Serie 5号、イタリア書房、平成二年九月、五四頁。

- (52) 国立国会図書館デジタルコレクションでは「ファシスタ伊太利亜大展覽会」という資料が公開されている。そこには函館会場での展覽会の様子が写真入りで詳細に報告されている。
- (53) 昭和十五年四月一日付『河北新報』「精神的な繋りこそ日伊親善の鍵よ」。
- (54) 昭和十五年四月二十七日付『北海タイムス』「伊太利をよくお知らせに」。
- (55) 昭和十五年四月二十八日付『小樽新聞』「伊太利の認識に三越に開く展覽会」。
- (56) 昭和十五年五月十六日付『函館新聞』「親善の旗」。
- (57) 昭和十五年六月一日付『新潟毎日新聞』「母国の参戦に就て」。
- (58) 「座談会回想」日伊協会の歩み『日伊協会史一九四〇〜一九九三年の歩み』日伊協会、平成五年、一五二頁。
- (59) 前掲注58、一五三頁。
- (60) 望月紀子『ダーチャと日本の強制収容所』未來社、平成二十七年、八一頁。
- (61) 昭和十六年九月二十六日付『朝日新聞』「ス特派陰の活躍」。
- (62) 小宮まゆみ「太平洋戦争下の『敵国人』抑留」日本国内に在住した英米系外国人の抑留について(研究)、『お茶の水史学』四三、平成十一年九月、二五頁。
- (63) 前掲注6、七八頁。
- (64) マリア・シーカ、アントニオ・ヴェルデ著『イタリア文化会館の歴史』イタリア文化会館、平成二十四年、七一頁。
- (65) 前掲注51、五四頁。
- (66) 前掲注51、五四頁。
- (67) JACAR Ref. A06030109400 (第一〇五画像目)、在留外国人名簿。
- (68) 前掲注2、六四〇〜六四四頁。
- (69) 前掲注51、五四頁。
- (70) 荒谷次郎「民衆的映画芸術の使徒ストラミジョーリ先生」『日伊文化研究』二七、日伊協会編、平成元年、七〇〜七五頁。
- (71) 田中純一郎『日本映画発達史 II』中央公論社、昭和三十二年、二九七頁。

- (72) 田中純一郎『日本映画発達史 III』中央公論社、昭和三十二年、八〇〜八一頁。
- (73) 前掲注72、八一頁。
- (74) 前掲注1、二頁。
- (75) 前掲注72、一六八〜一六九頁。
- (76) 『キネマ旬報』復刊第一号、昭和二十五年十月十五日、五一頁。
- (77) 前掲注72、一二二頁。
- (78) 前掲注1、四〜六頁。
- (79) 昭和二十六年九月三十日付『東京新聞』。「羅生門の受賞をめぐって」『映画新報』二一、昭和二十六年十月、二〇〜二二頁。永田雅一「『羅生門』を売り出す」『芸術新潮』二一一、昭和二十六年十一月、八九〜九二頁。昭和二十六年十月。井沢淳「『羅生門』のうらおもて―海外の反響―」『芸術新潮』三一四、昭和二十七年四月、一〇三〜一〇五頁。
- (80) 『羅生門』と『ストラミジョーリ神話』を巡って『日本大学芸術学部紀要』五八、日本大学芸術学部、平成二十五年、一三〜二二頁。
- (81) 基本的に文書資料はすべて浜野保樹へ渡されたときとされていたが、調査の際にこの一点だけ大内みついきさん宅に残されていた。
- (82) 田中純一郎『日本映画発達史 IV』中央公論社、昭和五十五年、一〇〇〜一〇一頁。
- (83) 『デ・シーカ、ロッセリニの近況など』イタリア・フィルム社長ストラミジョーリイ女史が語るイタリア映画界の近況『映画の友』二〇―二、昭和二十七年二月、八六頁。
- (84) 彼女の帰国は話題となり、昭和二十八年四月十四日付『毎日新聞(夕刊)』、同年四月十五日付『毎日新聞(夕刊)』、同年四月十六日付『報知新聞』、同年四月十七日付『時事新報』に紹介されている。
- (85) 『ジュリアーナ・ストラミジョーリ』人物紹介『キネマ旬報』七二、昭和二十八年九月一日、四二頁。岡俊雄「イタリア映画祭を控えて多忙なイタリアフィ

- ルム社長ストラミジョーリ女史を訪ねて フォト・インタビュー」『映画の友』二二―五、昭和三十年五月、九八―九九頁。阿部真之助ほか著『失礼御免』（要書房、昭和二十八年、六三―六七頁）では、渋沢秀雄が彼女に取材している。昭和三十年十一月二十七日付『朝日新聞』「ものあわれ」や『キネマ旬報』一四一（昭和三十一年三月十五日、四九頁）でも自宅で取材を受けている。昭和三十三年一月二十四日付『毎日新聞』の「紅毛江戸っ子（9）」の記事や昭和三十三年三月十七日付『日本経済新聞』での「日曜対談」でも取り上げられている。
- (86) 前掲注82、三七四―三七六頁。
- (87) 『映画の友』二二―五、昭和三十年五月、九九頁。
- (88) 前掲注51、五五頁。
- (89) 『映画と演芸』昭和三十年十一月二十五日、三〇―三二頁。
- (90) 『ストラミジョーリ「ローマでの感想」』『キネマ旬報』一四五、昭和三十一年五月一日、一一―四頁。
- (91) 前掲注82、三五一頁。
- (92) 前掲注82、三四八頁。
- (93) 『連合タイムス』連合タイムス社、昭和三十四年十月十六日号、四―五頁。
- (94) 『キネマ旬報』二四六、昭和三十四年十一月十五日、一三頁。
- (95) 前掲注1、一二頁。
- (96) 前掲注82、三四八頁。
- (97) 前掲注1、八頁。
- (98) 前掲注1、八頁。
- (99) 前掲注6、八一頁。
- (99) 前掲注6、八二頁。
- (100) 『十年の歩み』国文学研究資料館、昭和五十七年十月二十九日、三〇〇頁。
- (101) 前掲注51、五五頁。

(102) 昭和六十三年七月二十六日付『日本経済新聞(夕刊)』(訃報欄)、昭和六十三年七月二十六日付『毎日新聞(夕刊)』、「日伊文化交流―ストラミジョーリさん死去」、昭和六十三年七月二十六日付『読売新聞(夕刊)』、「日本文化の研究家」、昭和六十三年七月二十七日付『朝日新聞』、「道」「自転車泥棒」―伊の名作映画を紹介」など各社の新聞が報じた。

(103) 『日伊文化研究』二七号(日伊協会編、平成元年)では「追悼 ジュリアーナ・ストラミジョーリ女史」(六九―八二頁)として特集が生まれ、前掲注70(七〇―七五頁)と前掲注6(七六―八二頁)が掲載されている。

吉村信次郎「ジュリアーナ・ストラミジョーリ女史」(前掲注51、五一―五五頁)は前掲注1(九―十二頁)にも再録されている。

追記

昭和館では、平成二十五年度にイタリアにおいて文化人類学者のフォスコ・マラーイーニが日本で撮影した写真資料とともに、日本との関わりが深いイタリア人、ジュリアーナ・ストラミジョーリに関する資料を調査した。その際にローマ大学サピエンツァ校のマルコ・デル・ベーネ教授の提案で、彼女の最後の教え子であるテレサ・チャッパローニ・ラ・ロッカ女史(元ローマ大学サピエンツァ校講師)とともに、ストラミジョーリの姪であるエリサベッタ・バッタリーアさんのローマの自宅を訪問し資料の提供を受けた。また帰国後、ストラミジョーリの養女である茨城県在住の大内みついさん宅に訪問し聞き取りを行い、多くの資料を提供いただいた。ストラミジョーリと『羅生門』の関係について調査を行っていた浜野保樹先生は奇しくも平成二十六年一月三日に逝去しており、夫人から資料を拝見させていただいた。またイタリア書房の伊藤道一社長、イタリア文化会館の豊田雅子さん、ピノ・マラス氏らの御協力を得た。多くの方々のご協力に末筆ながら感謝の意を表します。

著者プロフィール

渡邊一弘（わたなべ・かずひろ） 昭和四十一年宮崎県生まれ。
日本民俗学専攻。鹿児島大学大学院人文科学研究所修了。総合研究大学院大学日本歴史
研究専攻博士後期課程修了。平成二十六年（二〇一四）『戦時中の弾丸除け信仰に関する
民俗学的研究〜千人針習俗を中心に〜』により文学博士。宮崎県史編さん室、宮崎県総
合博物館の嘱託職員などを経て、平成十三年から昭和館勤務。現在、昭和館調査役（図
書情報担当）。